<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>清代雍正朝における養廉銀の研究 (三) 地方財政の成立をめぐって</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>佐伯 富</td>
</tr>
<tr>
<td>印刷版</td>
<td>東洋史研究 30(4):351-388</td>
</tr>
<tr>
<td>トピック</td>
<td>安装段階の研究</td>
</tr>
<tr>
<td>タイムスタンプ</td>
<td>1972-03-30</td>
</tr>
<tr>
<td>速度</td>
<td>安装段階の研究</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="https://doi.org/10.14989/152848">https://doi.org/10.14989/152848</a></td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
<tr>
<td>公開者</td>
<td>京都大学</td>
</tr>
</tbody>
</table>
清代雍正朝における養廉銀の研究（三）

前章で述べたように、養廉銀の財源として諸種の藩余や規禮銀、官荘銀、俸工銀等があったが、その主體をなすものは

目次
一 はしがき
二 養廉銀の起原と沿革（以上第二十八号）
三 養廉銀の財源（以上第二十九号第一号）
四 養廉銀額（以下本号）
五 養廉銀制度
六 養廉銀額の支給法
(1) 養廉銀額決定の基準
(2) 束縛の程度
(3) 華彩等
七 附

佐
伯
富
<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>年次</th>
<th>從来</th>
<th>雍正元年</th>
<th>2</th>
<th>3</th>
<th>4</th>
<th>5</th>
<th>6</th>
<th>7</th>
<th>8</th>
<th>13</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>直隷</td>
<td>30〜40</td>
<td>20</td>
<td>13</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>陜西</td>
<td>25〜30</td>
<td>18</td>
<td></td>
<td>16</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>20〜50</td>
<td>30</td>
<td></td>
<td></td>
<td>25</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>吉林</td>
<td>20</td>
<td>15</td>
<td>10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山東</td>
<td>6〜8</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安江</td>
<td>6〜8</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>江奉</td>
<td>6〜8</td>
<td>5</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>10</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

第一表 各省耗差率変遷表 (10は加一)

この表は、各省の耗差率について、年次別、省別に示したものである。この表によれば、各省の耗差率は、雍正元年から現在までに大きな変化が見られる。特に、直隷省の耗差率は大幅に減少しているが、他方で陜西省の耗差率は増加している。このように、各省の耗差率は異なるため、今後はさらに詳細な研究が必要であると考えられる。

また、この表では、各省の耗差率の変動を示す図が掲載されているが、その詳細については、別途の報告で説明している。

消耗の処理についても、各省の状況は異なる。直隷省では、消耗を抑制するため、一定の制限が設けられている。これに対し、陜西省では消耗を積極的に促進している。これは、各省の経済状況や政策の違いによるものである。

表には、各省の経済状況や歴史的背景についての解説も記載されている。これにより、各省の消耗状況を理解することが可能になる。

なお、この表は、各省の消耗状況を把握するために作成されたものであり、今後も定期的に更新される予定である。
<table>
<thead>
<tr>
<th>年次</th>
<th>地丁微銀数（単位兩）</th>
<th>典 據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雍正元年</td>
<td>30,223,943</td>
<td>世宗實錄巻14</td>
</tr>
<tr>
<td>2年</td>
<td>30,446,692</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>3年</td>
<td>30,071,574</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>4年</td>
<td>29,546,418</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>5年</td>
<td>29,815,021</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>6年</td>
<td>29,499,916</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>7年</td>
<td>29,935,657</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>8年</td>
<td>29,786,806</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>9年</td>
<td>29,797,701</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>10年</td>
<td>30,089,004</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>11年</td>
<td>28,872,332</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>12年</td>
<td>29,901,631</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>年次</th>
<th>耗羡数</th>
<th>典 據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>直隷</td>
<td>雍正7年</td>
<td>300,000兩</td>
<td>雍正四庫全書巻 (9,83) b</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>4年</td>
<td>371,000兩</td>
<td>薄洞20,73 b</td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>6年</td>
<td>363,700兩</td>
<td>田文鏡31,59 b</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>8年</td>
<td>490,000兩</td>
<td>安部耗羡提解228頁</td>
</tr>
<tr>
<td>甘肅</td>
<td>3年</td>
<td>270,000兩</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>四川</td>
<td>3年</td>
<td>耗羡63,000石 (51,100)兩</td>
<td>石文藻11,97 a</td>
</tr>
<tr>
<td>雲南</td>
<td>8年</td>
<td>167,154兩</td>
<td>安部同上</td>
</tr>
<tr>
<td>貴州</td>
<td>4年</td>
<td>110,000兩</td>
<td>鄂爾泰26,71 a</td>
</tr>
<tr>
<td>湖南</td>
<td>6年</td>
<td>(150,000)兩</td>
<td>李成龍13,6 b</td>
</tr>
<tr>
<td>廣東</td>
<td>6年</td>
<td>(35,000)兩</td>
<td>安部同上</td>
</tr>
<tr>
<td>福建</td>
<td>7年</td>
<td>147,000兩</td>
<td>&quot;</td>
</tr>
<tr>
<td>江西</td>
<td>5年</td>
<td>140,000兩</td>
<td>前世明14,14 b</td>
</tr>
<tr>
<td>江蘇</td>
<td>7年</td>
<td>198,273兩</td>
<td>李學41,17 b</td>
</tr>
<tr>
<td>廣西</td>
<td>5年</td>
<td>415,304兩</td>
<td>魏廷珍37,77 a</td>
</tr>
<tr>
<td>天津</td>
<td>5年</td>
<td>145,232兩</td>
<td>陳時夏5,99 b</td>
</tr>
<tr>
<td>7年</td>
<td>3,495兩</td>
<td>李蘭18,30 a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>計</td>
<td>3,557,979兩</td>
<td>王朝恩36,45 a</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

* 耗羡は地丁銀を基準に徴収されるわけではない。
第四表 頸微地丁銀數と耗羡銀額數

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>年次（雍正）</th>
<th>頸微地丁銀數</th>
<th>耗羡銀額數</th>
<th>典（雍正殊批備號）</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>直隄</td>
<td>2. 8. 6</td>
<td>2,196,320兩</td>
<td>230,271兩</td>
<td>李維鈞5.36 b</td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>4. 10. 4</td>
<td>2,865,977兩</td>
<td>實收467,709兩</td>
<td>伊都立2.75 a</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>7. 6. 15</td>
<td>3,145,105兩</td>
<td>田文鏡32.39 a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>甘肅</td>
<td>3</td>
<td>3,000,000兩</td>
<td>60,000兩</td>
<td>儘吉徳8.38 b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3. 10. 1</td>
<td>1,360,000兩</td>
<td>安部耗羡解213頁</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>四川</td>
<td>4. 5. 11</td>
<td>260,000兩</td>
<td>40,000兩</td>
<td>高柴16.10.24 b</td>
</tr>
<tr>
<td>湖南</td>
<td>4. 1. 17</td>
<td>343,144兩</td>
<td>20,876兩</td>
<td>尹諤14.17 b</td>
</tr>
<tr>
<td>广東</td>
<td>4. 4. 14</td>
<td>(1,114,360兩)</td>
<td>167,154兩</td>
<td>周成龍13.6 b</td>
</tr>
<tr>
<td>浙江</td>
<td>7. 1. 25</td>
<td>1,100,000兩</td>
<td>110,000兩</td>
<td>李貞乾4.69 b</td>
</tr>
<tr>
<td>安徽</td>
<td>6. 6. 2</td>
<td>1,050,000兩</td>
<td>147,000兩</td>
<td>劉世明14.14 b</td>
</tr>
<tr>
<td>江西</td>
<td>7. 1. 10</td>
<td>2,000,000兩</td>
<td>(5,12.3)</td>
<td>高斌50.68 b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5. 11. 6</td>
<td>1,982,739兩</td>
<td>198,273兩</td>
<td>孫修41.17 b</td>
</tr>
<tr>
<td>天津</td>
<td>5</td>
<td>3,561,858兩</td>
<td>415,304兩</td>
<td>鄭時夏5.99 b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7. 6. 4</td>
<td>34,592兩</td>
<td>145,923兩</td>
<td>李龍18.30 a</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*この頃甘肅における每石糧價は7錢

大体、地丁銀額は大して大きな変動はないが、特別な災害や事変のない限り、耗羡徴收額にも大きな変化はないからである。ところで各省の耗羡額の総計は約三百五六萬兩である。それに地丁銀額から割り出した耗羡額四百二十萬兩の間に、約四十四萬兩のひらががあるが、大槻、二百五十萬乃至四百二十萬両という数字が書かずといえども、騒からなる耗羡額であろうと思われる。

(2) 養廉銀の耗羡中に占める割合
と災難銀数との関係を示す統計を示せば第四表の通りである。

そこで地方経費、これを公項と称するならば、公項中には、さきに述べたように、種類の災難や規律金があるが、災

発表を公項中の主なる部分を占めている。従って養廉銀の比率は如何であつたのであるか。

謄旨（598）雍正五年十一月初一日、蘇州巡撫陳時夏の上奏の一節に

酌々各州縣統計。国体二分。以為養廉。以八分解司公用。以通省之耗資。辦通省之公務。

と在る、江蘇省では養廉と地方衙門の事務費、つまり公務の費との割合は三對八である。更に謄旨（1573）雍正五年十一

月一日、蘇州布政使張垣麟の上奏中にも

總納正雜糧耗資。俱以加一為率。以二分留為州縣養廉。以八分解支公用。
至耗羡一項。每年錢糧，以三百萬兩為率。……今以加一八通算。約可得銀五百四萬兩。臣等會議。以二十萬兩。彌補。

とあり、山東省では雍正二年、加耗の率を十八％に切り下げ、五十四萬兩の耗羡をえている。このうち二十萬兩をもっ
て、從來の虧空を彌補し、二十萬兩を養廉としている。残り、十四萬兩が公費ということになる。

の割合は五十九％対四十一％ということになる。

また諭旨（3984）署理直隷總督事務。提督臣楊緯、上奏に
直隷本年（七年）耗羡。

と見る。すなわち直隷省においては、雍正七年、耗羡銀中、養廉銀は七十％を占めている。

在湖北湖南。各額微銀一百二十餘萬。前督臣楊宗仁、定以加一耗羡。以三分分給司道府廳州縣各官。為養廉之需。

とあり、湖廣においては、十一萬兩餘の耗羡銀を養廉七十％、公費三十％の割合に分配している。

又、諭旨（136）雍正四年正月十七日、湖廣總督李成龍の上奏には

查湖廣湖南、各額微銀一百二十餘萬。前督臣楊宗仁、定以加一耗羡。以三分分給司道府

及び各省耗羡。舊例。加一徵収内。除二分七釐為解領並通省公費。其餘係督撫兩司府廳州縣養廉。并

起解錢糧等項。及圖各省耗羡。
第五表 耗材中における養廉銀と公費との割合

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>養廉銀</th>
<th>公費</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>江蘇</td>
<td>20%</td>
<td>80%</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>59</td>
<td>41</td>
</tr>
<tr>
<td>山東</td>
<td>70</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>湖南</td>
<td>70</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>江西</td>
<td>73(70)</td>
<td>27(30)</td>
</tr>
<tr>
<td>福建*</td>
<td>56</td>
<td>44</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*印耗差の外，平餘・雜欵等を含む。

見ている。官養廉銀一万一三十二兩。給發各州縣役頒給空銀二萬五千兩。給發過各

零。又普通公費共銀二千一百零兩零。

省分 | 養廉銀 | 公費 |
<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th></th>
<th></th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>江蘇</td>
<td>20%</td>
<td>80%</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>59</td>
<td>41</td>
</tr>
<tr>
<td>山東</td>
<td>70</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>湖南</td>
<td>70</td>
<td>30</td>
</tr>
<tr>
<td>江西</td>
<td>73(70)</td>
<td>27(30)</td>
</tr>
<tr>
<td>福建*</td>
<td>56</td>
<td>44</td>
</tr>
</tbody>
</table>

*印耗差の外，平餘・雜欵等を含む。

見ている。官養廉銀一万一三十二兩。給發各州縣役頒給空銀二萬五千兩。給發過各
地方行政の養廉銀額

地方行政の養廉銀額は、地方の行政の重要性によって決まるものであり、地方の行政の地位を反映するものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。

地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可欠なものである。地方行政の養廉銀額は、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺なものであり、地方の行政の役割を果たすために必要不可缺の
### 第六表 總督養廉銀額

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>年次</th>
<th>總督名</th>
<th>養廉銀額</th>
<th>典</th>
<th>據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>直隸</td>
<td>雍正5年</td>
<td>宜兆熊(署理)</td>
<td>7,000兩</td>
<td>諭旨宜兆熊</td>
<td>14.94b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7年</td>
<td>楊鍇(署理)</td>
<td>7,000兩</td>
<td>世宗實錄</td>
<td>54</td>
</tr>
<tr>
<td>山西</td>
<td>5年</td>
<td>鄧宗泰</td>
<td>30,000兩</td>
<td>諭旨，高其倬</td>
<td>45.71a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>李衛</td>
<td>30,000兩</td>
<td>諭旨，楊文乾</td>
<td>4.69b</td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>5年</td>
<td>鄧宗泰(署理)</td>
<td>16,000兩</td>
<td>諭旨，程元章</td>
<td>52.96a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>程元章</td>
<td>13,000兩</td>
<td>諭旨，李衛</td>
<td>42.78b</td>
</tr>
<tr>
<td>陝西</td>
<td>3年</td>
<td>高其倬</td>
<td>26,000〜27,000兩</td>
<td>諭旨，高其倬</td>
<td>46.85b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6年</td>
<td>鄧宗泰</td>
<td>17,000兩</td>
<td>諭旨，楊文乾</td>
<td>4.69b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4年</td>
<td>楊文乾</td>
<td>9,000兩</td>
<td>諭旨，程元章</td>
<td>52.96a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>10年</td>
<td>鄧宗泰(署理)</td>
<td>16,000兩</td>
<td>諭旨，李衛</td>
<td>42.78b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>8年</td>
<td>程元章</td>
<td>13,000兩</td>
<td>諭旨，高其倬</td>
<td>45.71a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>12年</td>
<td>李衛</td>
<td>約13,000兩</td>
<td>諭旨，高其倬</td>
<td>46.85b</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 第七表 巡撫養廉銀額

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>年次</th>
<th>巡撫名</th>
<th>養廉銀額</th>
<th>典</th>
<th>據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>山西</td>
<td>雍正4年</td>
<td>總督管理伊都立</td>
<td>31,700兩</td>
<td>諭旨，伊都立</td>
<td>2.70a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>稽理，塞楞額</td>
<td>30,000兩</td>
<td>世宗實錄</td>
<td>54</td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>5年</td>
<td>稽理，塞楞額</td>
<td>30,000兩</td>
<td>世宗實錄</td>
<td>54</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>李衛</td>
<td>20,000兩</td>
<td>諭旨，塞楞額</td>
<td>10.38a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7年</td>
<td>許容(察州)</td>
<td>11,900兩</td>
<td>諭旨，許容</td>
<td>53.19a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>馬會伯</td>
<td>39,560兩</td>
<td>諭旨，馬會伯</td>
<td>12.20a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>3年</td>
<td>石禮哈</td>
<td>8,500兩</td>
<td>諭旨，高其倬</td>
<td>45.71b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6年</td>
<td>總督，鄂爾泰</td>
<td>12,000兩</td>
<td>諭旨，鄂爾泰</td>
<td>27.36a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>鄧宗泰(署理)</td>
<td>9,000兩</td>
<td>諭旨，鄂爾泰</td>
<td>27.36a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>4年</td>
<td>楊文乾</td>
<td>9,000兩</td>
<td>諭旨，楊文乾</td>
<td>4.69b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>10年</td>
<td>金鉉</td>
<td>8,400兩</td>
<td>諭旨，金鉉</td>
<td>49.93a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>7年</td>
<td>劉世明</td>
<td>33,000兩</td>
<td>諭旨，劉世明</td>
<td>14.16a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>10年</td>
<td>程元章</td>
<td>10,000兩</td>
<td>諭旨，程元章</td>
<td>52.96a</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>5年</td>
<td>布蘭泰</td>
<td>8,800兩</td>
<td>諭旨，布蘭泰</td>
<td>6.29b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>6年</td>
<td>稽理，張剛麟</td>
<td>7,000兩〜10,000兩</td>
<td>諭旨，張剛麟</td>
<td>15.90a</td>
</tr>
</tbody>
</table>
馬糧十分。一年約有銀三千餘兩。雖係向來督臣衙門相傳舊例。云云。とあり、福建總督には馬糧十分、約三千餘兩が支給されていた。

なお清運業務関係の官吏、ならびに布政使、按察使、道員、府州縣官の養廉銀額を参考のため表示すれば次の通りである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>官職</th>
<th>銀額</th>
<th>種類</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>布政使</td>
<td>4,000兩 (2)</td>
<td>銀元</td>
</tr>
<tr>
<td>按察使</td>
<td>2,000兩 (1)</td>
<td>銀元</td>
</tr>
<tr>
<td>道員</td>
<td>6,000兩 (6)</td>
<td>銀元</td>
</tr>
<tr>
<td>府州縣官</td>
<td>2,000兩 (7)</td>
<td>銀元</td>
</tr>
</tbody>
</table>

なお清運業務関係の官吏、ならびに布政使、按察使、道員、府州縣官の養廉銀額を参考のため表示すれば次の通りである。

<table>
<thead>
<tr>
<th>種類</th>
<th>銀額</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>銀元</td>
<td>3,000兩 (6)</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>45.75b</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>41.40a</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>52.66a</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>44.48a</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>41.90a</td>
</tr>
<tr>
<td>俸給</td>
<td>31.90a</td>
</tr>
</tbody>
</table>
### 第九表 布按養廉銀額（*印公費を含む）

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>布政使</th>
<th>按察使</th>
<th>典</th>
<th>據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>直隷</td>
<td>10,000兩(5)</td>
<td>8,000兩(5)</td>
<td>畦業，宜兆熊14.94 b</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>* 24,000 (2)</td>
<td>* 10,000 (2)</td>
<td>石文焯11.67 a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山東</td>
<td>10,000 (5)</td>
<td>署理 4,660(4)</td>
<td>塞楞額10.38 a，張保17.9 b</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>陝西</td>
<td>14,000→10,000(7)</td>
<td></td>
<td>田文鏡31.90 a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>雲貴</td>
<td>4,000 (3)</td>
<td>3,000 (3)</td>
<td>黃廷桂50.18 a</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>廣東</td>
<td>9,000 (4)</td>
<td></td>
<td>楊文乾 4.69 b</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 第十表 道員養廉銀額

<table>
<thead>
<tr>
<th>省分</th>
<th>養廉銀額</th>
<th>典</th>
<th>據</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>河南</td>
<td>開北道 10,000兩(2)</td>
<td></td>
<td>畦業，石文焯 11.67 a</td>
</tr>
<tr>
<td>南河</td>
<td>4,000 (2)</td>
<td></td>
<td>田文鏡 31.44 a</td>
</tr>
<tr>
<td>北河</td>
<td>4,000 (6)</td>
<td></td>
<td>田文鏡 32.28 b</td>
</tr>
<tr>
<td>稲柵</td>
<td>3,000 (6)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>河北</td>
<td>3,200 (7)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>河南</td>
<td>3,000 (7)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>達道</td>
<td>2,800 (7)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>山東</td>
<td>道員 6,000→3,000 (6)</td>
<td></td>
<td>田文鏡 31.79 b</td>
</tr>
<tr>
<td>甘肅</td>
<td>道員 1,000 (3)</td>
<td></td>
<td>石文焯 11.97 a</td>
</tr>
<tr>
<td>陝西</td>
<td>榮林，神木，漢興道 500 (?</td>
<td></td>
<td>查郎阿 50.18 a</td>
</tr>
<tr>
<td>雲貴</td>
<td>貴東道 2,000 (3)</td>
<td></td>
<td>高其倬 45.75 b</td>
</tr>
<tr>
<td>貴西</td>
<td>1,800 (3)</td>
<td></td>
<td>鄂爾泰 26.43 b</td>
</tr>
<tr>
<td>鹽道</td>
<td>5,000 (6)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>廣西</td>
<td>左右江二道 各 1,600 (8)</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>蒼梧道 2,400 (8)</td>
<td></td>
<td>28.23 b</td>
</tr>
<tr>
<td>湖南</td>
<td>辰沅靖道 5,000 (?</td>
<td></td>
<td>王朝恩 36.66 b</td>
</tr>
<tr>
<td>浙江</td>
<td>寧氛道 3,000 (6)</td>
<td></td>
<td>李衙 41.90 b</td>
</tr>
<tr>
<td>順德</td>
<td>3,000 (6)</td>
<td></td>
<td>程元章 52.90 b</td>
</tr>
<tr>
<td>1,600→2,600</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>安徽</td>
<td>江道 3,000 (6)</td>
<td></td>
<td>徐本 37.16 b</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>順陽道 2,000</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

*印公費を含む。
( )内年度数
<table>
<thead>
<tr>
<th>项目</th>
<th>1.000(1)</th>
<th>2.000(2)</th>
<th>3.000(3)</th>
<th>4.000(4)</th>
<th>5.000(5)</th>
<th>6.000(6)</th>
<th>7.000(7)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>項目</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>場合</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
千兩まで、二千兩というのが普通であったらしい。直隷州知州は二千兩、府州は千兩、州縣は五百両、府州の属官、同知、通判は大体五百両、知州知州は千兩、州縣は五百両、小州縣は二百両ほどになったようである。さらに州縣の佐貳、雜職官にも養廉銀が与えられた。官吏としては最下層のものである。いかほどの養廉銀が支給されるかを考察を加えよう。論旨（31 Ａ）雍正六年二月二日、河南總督田文鏡の上奏中には、河南省の府州知州、川判、総督以下は二百両、巡按には五十両を支給し、その上に総督、督軍は四百両で、巡按以下は百兩である。之の大体の養廉銀を支給することが判り得ている。また論旨（32 Ａ）雍正七年六月二日、河東總督田文鏡の上奏中には、各省の府州知州、川判、総督高其倬、安微巡撫徐本の上奏には、其藩臬司首領官三員、各府首領官共十四員、各府知州、川判、総督高其倬、安微巡撫徐本の上奏には、二百両、巡按には百兩を支給し、その上に総督、督軍は四百両で、巡按以下は百両である。之の大体の養廉銀を支給することが判り得ている。
と見え、陕西総督查爾阿等は首領・佐貢百四十二名に対し、養廉公費一万六百両を支給せんことを請うているが、雍正帝はこれに対し、「佐貢・巡撫之議、尚属可行」として許可している。これによれば、陕西省では一員平均七十四両ばかりの養廉銀が首領・佐貢・巡撫に支給されたいわけである。また諭旨（28272）雍正九年正月二十八日、雲貴広西総督鄂爾泰の上奏には、余等巡撫、如經過、照舊、司獄・吏目・長官司吏目・典史・巡撫等、黔省共七十七名。原議議給、然亦約需五千餘兩。とあり、雲貴・広西総督鄂爾泰は貴州省の養廉銀五千餘兩に対し、養廉銀約五千餘両を支給せんことを請い、雍正帝は裁可している。一員あたり六十五兩である。また諭旨（2244b）雍正七年三月初八日、湖北布政使徐鼎の上奏によると、佐貢百六七十名に対し、五萬餘兩の養廉銀の支給を求めている。湖広布政使徐鼎は佐貢でも地方を巡査しており、提工を看守する等特別な公務があったために養廉銀の額が高いためである。

六十七員。養銀五萬餘両。佐貢百八十名に対し、五千餘兩の養廉銀の支給を求めている。湖広布政使徐鼎は佐貢でも地方を巡査しており、提工を看守する等特別な公務があったために養廉銀の額が高いためである。

以上、總督・巡撫の養廉銀額を想定するに、普通の省分で、大約五十餘兩から百二十餘両、佐貢百八十名に対し、五千餘両の養廉銀が支給されると大略三萬両と一萬八千両ほどである。これをその俸銀百八十両と百五十餘両とに比べると、總督・巡撫の養廉銀額が低い。
<table>
<thead>
<tr>
<th>部位</th>
<th>重度</th>
<th>訪問</th>
<th>関節</th>
<th>長期</th>
<th>緊急</th>
<th>一般</th>
<th>他の</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>頸部</td>
<td>好軸</td>
<td>初期</td>
<td>早期</td>
<td>中期</td>
<td>末期</td>
<td>前期</td>
<td>後期</td>
</tr>
<tr>
<td>胸部</td>
<td>重度</td>
<td>重度</td>
<td>中期</td>
<td>末期</td>
<td>中期</td>
<td>末期</td>
<td>前期</td>
</tr>
<tr>
<td>腹部</td>
<td>好軸</td>
<td>初期</td>
<td>早期</td>
<td>中期</td>
<td>末期</td>
<td>前期</td>
<td>後期</td>
</tr>
<tr>
<td>腰部</td>
<td>好軸</td>
<td>初期</td>
<td>早期</td>
<td>中期</td>
<td>末期</td>
<td>前期</td>
<td>後期</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>他人</th>
<th>長期</th>
<th>一般</th>
<th>他の</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>頸部</td>
<td>好軸</td>
<td>重度</td>
<td>重度</td>
</tr>
<tr>
<td>胸部</td>
<td>好軸</td>
<td>中期</td>
<td>中期</td>
</tr>
<tr>
<td>腹部</td>
<td>好軸</td>
<td>重度</td>
<td>重度</td>
</tr>
<tr>
<td>腰部</td>
<td>好軸</td>
<td>中期</td>
<td>中期</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>21</th>
<th>49</th>
<th>57</th>
<th>65</th>
<th>73</th>
<th>81</th>
<th>89</th>
<th>97</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>13</td>
<td>31</td>
<td>39</td>
<td>47</td>
<td>55</td>
<td>63</td>
<td>71</td>
<td>79</td>
</tr>
</tbody>
</table>
（24）雍正元年十一月二十二日，山東巡撫黃炳の上奏に
っていたであろうか。諭旨（24）年正月二十四日，山東
巡撫各二千兩，鹽道及び鹽商規禮銀各三千兩，
通計銀十一萬餘兩。

又、山東巡撫には，養廉銀支給前，各属の節禮
銀六萬餘兩，丁地規禮銀一萬餘兩，司庫俸餘銀三
萬兩，
駁道糧道規禮銀各二千兩。

東署理巡撫の實際の入入れは，従来に比べて五分の一
乃至六分の一に切下げられたことになる。また役
旨（29）年

五 養廉銀制度

（1）養廉銀額決定の基準

養廉銀を受けているから，巡撫の入入れは約七分の一
に減らされたことになる。雍正五年の頃，河南巡
撫は養廉銀の支給によって，官僚は実質的には従来の入
入れの五分の一

を減らされたわけである。ここに場面においては官僚の
強い反対があったことが想定されるのである。
謄旨（364 a） 雍正八年四月十一日、山東布政使孫國霽の上奏中

とあり、山東省では養廉公費は、府州縣の衙役を基準にした支給するといっている。衙役は衙役の意味である。また謄旨

（45 b） 雍正三年正月二十六日、雲貴總督高其倬の上奏中には

自巡撫司道以下及府州縣。分別衙役繁簡。酌定養廉之數。とあり、雲貴では巡撫司道以下府州縣の衙役銀数は、その所属の衙役だけである。衙役の衙役を定めるためある。

査各州縣之繁簡。惟在衙役繁簡之多寡。即以衙役繁簡之多寡。定州縣之養廉。とあるように、衙役繁簡の多寡が主として衙役の繁簡を意味したようである。また謄旨

署理江西巡撫張培勳の上奏中に

各官養廉。則分別地方之大小。事務之繁簡。減有餘。增不敷。酌量均派。

とあり、府州縣の大小ということも、養廉銀額決定の要件となったのである。第十一表「府州縣官養廉銀額」を見れば、容易に理解されるであろう。

次に謄旨（39 b）雍正七年二月十五日、湖南布政使趙城の上奏に、養廉の使途について述べた中に

臣今現與撫臣商酌。就官職大小。事件繁簡。通長計算。酌量均分。務使普遍聖澤。

と見え、湖南においては、布政使趙城は、事務の繁簡とともに、官職の大小をも考慮して養廉銀額を決定するといっている。

以上述べたところにより、養廉銀額は、その地域の管理する地域の大小、衙役、繁簡、官職の大小などを斟酌して決定されることが判明する。
養廉銀の支給法

第三章 第一節「耗差提解」の條において述べた如く、耗差を一旦全布政司庫に解送して地方公費となし、然る後（官役に更めて養廉銀を支給するというが、雍正帝の基本方針であった。それは地方上官の屬官に対する払か、養廉銀を一上奏に、士俊の上奏にもとづく人民に対する詐略を禁止するためであった。詔旨（1964年）養正九月十二月二日、湖廣節度王士俊の上奏の中

耗差の布政司庫解送を免除したのは、耗差数が少ないというのが一つの理由であるから、廃差のない州の有も、養廉銀を全布政司庫から支給するというのが原則であった。しかしそ、養正時代には、州縣で養廉銀を支給したのは数省にすぎず、例外であった。ところが、乾隆三年になると、耗差の布政司庫提解が改められ、州縣官はもよりの州縣において養廉銀を受領することができる。それは上記の理由のほか、養廉銀支給の回数と関係があったからである。人民が規則通りに錢糧を納付すれば、養廉銀を一度に支給することも可能であるが、延納や延納が多くなるとき、詔旨はゆかぬ。ここのから養廉銀は每月もしくは
四よしに支給されたのである。諫旨（3782）雍正七年十月二十五日、江南安徽巡撫魏廷珍の上奏に

「各官養廉。……陸續按季給發各官養廉。」

とあり、安徽省では養廉は四よしに支給されている。また諫旨（3228）雍正七年五月十四日、河東總督田文鏡の上奏に

「将豫省各道、於現給養廉外。每員每年加給二千兩。請於雍正七年為始。在司庫耗賔内。按季支給。則各道均沐天恩於

無既矣。」

あり、田文鏡は河南省道員の養廉銀を毎年毎員一千兩を加給し、これを四よしに分けて支給したいと請い、裁可されている。

また諫旨（58）雍正五年十一月初六日、蘇州巡撫陳時夏の上奏にも

「應給（江蘇）各衙門養廉。照所定之數。按季給發。」

とあるように、養廉関係の官吏も同様であった。また諫旨（321）雍正七年三月十八日、河東總督田文鏡の上奏中に

「は、諫旨を引用している。」

が普通であったことが判明するであろう。すなわち、河務官にやや、四よし毎に養廉を與えるよう命じている。上述べた所により、養廉銀は四よし毎に支給する

ただ諫旨（2945）雍正二年十一月二十一日、署理河南巡撫・布政使田文鏡の上奏中に

閑之賢。
茲於本年十一月十一日，接到撫臣石文蠰來字內開，除前間養廉按月支領外，將九月以來未經支領養廉銀兩。照奏過數

(3) 

署理養廉與未使用養廉

中

兵備道王敟福。前在杭嘉湖道任內，年給養廉銀一千六百兩。因兼辦海塘公務，又增給銀一千兩。俟工竣時其添給。因新設海塘船廠，經臣題明。委令該道。杭嘉湖道。監督料理。業經准有部覆。則該道督辦船工。亦有往返奔馳。差遣盤費等項。若僅給銀一千六百兩。實有不敷。應照。年給養廉銀二千六百兩。以足用度。
等の養廉銀支給に関して上奏したるに對し、雍正帝は次のような硃批を與えている。

所論大小各員。均屬安協。惟田文鏡今既兼督東省。亦當增給養廉銀萬金。方為合宜。督臣統轄將弁。較之撫臣。賞犒

すなわち、大小各員の養廉銀額は妥當である。しかし河南總督の田文鏡は山東總督を兼務しているから一萬兩を増給せ
よ。總督は巡撫に比べると、將弁を統轄し、賞納費も多いはずだ。田文鏡自らは言い難いので、汝がこととを言及しな
かったのは粗忽の罪は免れぬと、丘濬は雍正帝から叱られている。この件はまもなく実行に移された。ところが田文鏡は
上奏を上り、河南では三萬三千九百兩の養廉を受け、充分であるからと辞退したが、雍正帝は許さなかった。

此番添給之議。實奉朕命。而非出於丘濬之意。何乃如是堅辭耶。すなわち今度の養廉銀増給の議は、朕が命じたものだ。丘濬の意見に出るものではない。どうしてそんなに堅く辞退す

るかと雍正帝はいる。雍正六年十月十一日、湖南布政使趙城の上奏中に

其有署事兼攝官員。雖公事繁多。不無需費。但既有本任養廉。未便又全給署任養廉。應請扣存一半。貯司庫。統歸公

項。以爲地方公用。とあり、署事兼攝官はすでに本任の養廉があるから、半額を支給し、半額は司庫に貯えて地方公費に充てたいと、趙城は

上請しているが、雍正帝は「督撫臣と商酌して之を行なえ」と硃批を與えているから、この通り実施されたようである。

軒凡直省此等奏請。朕欽付之一覽而已。是當與否在汝等公事酌酌辦理也。
すなわち、朕は奏請を一覧するのみ、他の方針を断じて辦理せよ、といっているから、このまま実施されたであろう。先に掲げた諸例から考えると、全国の養廉銀額は大体の本分の半分というのである。しかも使用し盡せぬ養廉銀は、地方公費にまわされ、查省各官養廉内、有離任之員。而接任官未及到任之日、専有裁量銀二項。原令布政司漕查李報、以充本省公用之費。為着之。裁量銀を通用するために、養廉の裁量銀を使用せんことを上請しているが、雍正帝は「水利を興修するは、原と\n\n直隷・山東・河南三省の總督・巡撫・布政使・按察使の、新しく補任した者を除き、その養廉銀の支給を停止させようとしている。以上の諸例は乾隆時代のものであるが、雍正時代にも、巻罰を受けた官僚の養廉銀は、一時、停止せ

--- 76 ---
養廉銀はさきに述べたように、元来、地方官に与えられた職務俸であるが、しかし私公の別がはっきりせず、地方官の私生活だけでなく、衙門の修理工、諸種の公務のためにも使用された。したがって、養廉銀の用途は如何なるものであったのかを明かにすることは、養廉銀査点（4278b）雍正八年九月初六日、浙江總督李習の上奏には、これ見ると現わる。養廉銀は家口の養婚とその生活、すなわち官僚の個人的経費と幕友の束縛、つまらない浄化の謝礼金と各種の公
官僚の私生活の仕事もするが衙門内の公務にも携わるので、家人に対する経費は私用か公用かということになると、はだ曖昧になるが、ここでは一応私費のうちに含めて論を進める。なお以上の三項目を考えると、家費は

b）雍正六年五月十八日、福建巡撫朱綸の上奏中に、鄂爾泰の言を引いて、次のようにいう。水並赴間繡賤等費、所得養廉銀。

水並赴間繡等費、所得養廉銀。督臣衙門與臣衙門無異。臣方敬於收受。沾皇上天恩。以爲輪賞兵弁、幕賓東僉、日用薪

すなわち兵弁を輪賞する費と、赴間の歓迎、幕賓の東僉とはともに公費に當る。日用薪水はもちろん官僚の私生活費であ

それでは養廉銀中、私生活経費は一體どの位を占めていたのであろうか。もちろん官僚個人の性格、その地位、時代に

って異なる。若千の具体的な例を示そう。鴻旨（485b）雍正九年十一月十八日、兩江總督高其倬の上奏に対する雍正

帝の批示に。

鄂爾泰到京。上奏。家口薪水之費。高金委屬過多。每月二百金計之。一年六千金。専敷用度。云云。

とあり、雲貴總督であった鄂爾泰が都に帰り、雍正帝に対して、家口薪水費は年間六千兩もあれば充分であると報告して

いる。先に表示したように（第六表）雍正七年、雲貴總督鄂爾泰の養廉銀額は一萬七千兩であるから、その三十五％が

また鴻旨（5319a）雍正七年三月十二日、蘭州巡撫許容の上奏中に。

查臣衙門、向有養廉銀一萬一千九百餘兩。此之……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。

歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。歳支銀七百五十兩。糧料四百五十石。……今約略計算。每年廣摂進京往返路費。並臣衙門筆帖式十五分。尚有糧三十分。
とあり、蘭州巡撫の養廉銀額は一萬一千九百餘兩、そのうち公費、束脩費が七十三四百餘兩、なお五千餘兩並びに糧料を

薪水日用の費としてよさそうである。郎中丁馬糧はしばらく除けず、養廉銀だけに之を考えて考えると、薪水日用費はその

四十二％に當っている。

また諌旨（1611 b）雍正三年四川三月十三日、江西布政使常德壽の上奏中に

除臣衙門一切公用約共銀三千五百兩。又臣幕賓束脩一千五百兩。毎年共該用銀六千兩。……至臣日用薪水是等費無

多。總不過三千兩。…

と見える。江西布政使では公費六千兩に於し、日用薪水費は三千兩にすぎなかったという。三千兩とすれば二十五％となる。

地方官にあっては、私生活費は養廉銀額中、大體三、四割を占めていたことが明らかになった。

日用薪水とは官僚の私生活費と考えてよろう。先掟の史料に全身用度、家口養餉費、家人工食とあるのはその主なも

のである。なお諌旨（2736 a）雍正七年二月二十四日、雲貴廣西總督鄂爾泰の上奏中に、養廉銀の使途を述べ

表祖父墓道。

に之を読む。すなわち、舊典の老屋を買戻してこれを修理し、あるいは祖父の祠堂を改置し、墓道を標示する石碑を建

てる費用等にも養廉銀は使用されたのである。また諌旨（3366 b）雍正九年五月十四日、河東總督田文鏡の上奏中にも

臣蒙皇上恩賜養廉一萬餘兩。意欲即買此屋。今家口往彼居住。
幕友の東條

前節で述べたように、養廉銀の支給は上級の地方官についての例であるが、下級の地方官も養廉銀の数倍の養廉銀を支給される。しかも下級の地方官にあたる地方には、公務の負担も重く、公務のために養廉銀を支給することができたものと思われる。このように考えると、養廉銀の支給によって、官僚の私生活は一応安定したものということができよう。

(2) 幕友の東條
地方衙門には公費があり、地方行政の運営費として各種の方面に使用されたことについては岩見宏氏の詳細な研究があ
る。ところでここに述べようとする養廉銀は、元来、地方衙門において、公費とは別枠の項目として設定されたものであ
るが、實際には公費と殆ど同義となるところがある。公費としては使用されたのである。養廉銀の公費として使用された用途は多岐に亘り、また上級下級の衙門によっても異るが、それ重要なものである。養廉銀の使途について述べている。論旨（135 b）雍正五年二月一日、廣東布政使常第上奏中、養廉銀の使途を述べた中で

家省布用度、幕賓吏僉、修理工書庫庫蔵等項。共用去資者八百餘兩。

つまり廣東布政使では衙門や庫蔵の修理費が、養廉銀の重要な使途の一つであったという。また論旨（153 b）雍正七年四月一日、蘇州布政使高斌の上奏中、養廉銀の使途について

とあり、衙門の粘補とともに器物等の製作費にも使用されている。

江南総督趙弘毅の上奏中に養廉銀の使途について、

製辦中器物。粘補衙署。

次に衙門内的人件費である。論旨（5075 a）雍正七年十一月十四日、蘇州布政使高斌の上奏中、衙門に封鎖された書

動態にについて述べた後に

分住各房書辦、已於七月十一日。封鎖既防。其所需薪水之費。於殿賞大臣養廉一萬兩内。一年賞給星書辦銀一千兩。按

月散給。
旨（44 26 2）雍正三年十二月二日、副總河墾督協的上奏中に

副總河有巡査兩岸工程、稽查積糧之責。出門車馬・船隻・幕賓・書吏・從役飯食・及紙張等物。俱不能無費。

とあり、副總河には、工程を巡査し、積糧を稽査する責があり、そのための車馬船隻の費、幕友の東嶽・書吏・役人に対

する飯食銀、その他紙張等の事務費が必要であるから、養廉銀を交付してほしきと上請したるに對し、雍正帝は「養廉之

需・安可一日缺乏」・っていているから、そのまま裁可されたものと思われる。

第二に是門の運営費である。これには旅費、犒勞費、事務費等がある。諭旨（49 93 a）雍正十年正月十二日、廣西巡

撫金鉄の上奏に

とあり、廣西巡撫金鉄は、旅費、文武の勞賞、損恤を養廉銀の重要な便途としてあげてある。また諭旨（57 66 a）雍正十

年八月初六日、江南總督趙弘恩の上奏中に、總督の養廉銀の主な便途をあげて

検賞兵弁・幕賓文書・日用薪水並赴閭協経費等、

福建巡撫朱綱の上奏中に、養廉銀の便途をあげて

といい、検賞・器物費・衙門粘補の費のほか、旅費をその一につにあげている。

また諭旨（12 97 b）雍正六年五月初十日、

兵弁の犒賞、幕友の東嶽、日用薪水のほかに旅費を計上している。以上の史料によって、旅費を文武兵弁に対する犒賞費

が、養廉銀の重要な便途であったことが判明する。

以上の三例は巡撫の場合であるが、さらに下級の地方官においても同

様である。諭旨（36 66 b）湖南辰沅靖道王柔の上奏には

蒙恩賜五千金養廉。以爲犒賞之需。
以上の述べたことにより、養廉銀は地方衙門の維持と運営に欠くことのできない重要な公費であったことが明らかになったことと思う。しかも、官僚が俸給に数倍乃至百十数倍する養廉銀を支給され、その生活が一応安定したことは、官僚の綱紀を振興する上において、かなりの成果をあげえたものと思われる。

以上、養廉銀の起源と沿革、養廉銀の財源、養廉銀額、養廉銀制度、養廉銀の使途の五章にわたって、養廉銀の実態を分析してきた。この制度により、これまで地方官が闊々と私にしていた耗差銀や陋規が明るみに出され規制され、その額が減坐されたことは、人民にとっては大きな恩恵であった。そして地方経費が一応明確化し、豫算化されたことは、地方行政実施の上において、大きな進歩といわなければならない。またこれまで暗い方法で官僚の生活を支えていた耗差や陋規を計を一応安定せめ、黒い霧をつめた従来の官場にある明かるさをもたらし、官界の薬清に役立ったことは疑いを容れぬところである。

ところで、先きに述べたように、養廉銀は俸給の数倍から百十数倍にも及び、官僚はこれによって生活は一応安定したといわれるものの、従来、彼等が受けていた陋規や耗差の額に比べると、実際には六七分の一にも減額されたのである。養廉銀制度の初め、官僚がいろいろの理由をつけて反對したのは、一つにはここに原因があったのである。官僚の反對も養廉銀の制度は、ともかく次第に全国的に実施され、その
支経範囲を地方正官から佐貳・雑職官にまで及び、ついには中央政府の官にまで拡大されるに至ったのである。その背景には田文鏡、諸臣等の如く、養廉銀の実施に対して熱心に取組んだ官僚のいたことも事実である。こうして養廉銀制度の実施により、雍正時代、官界がある程度唾棄され、地方政治がかなり円滑にうまく運営されたことは認めなければならない。

ところが、次の乾隆時代にうつると、君主独裁権の弱体化とともに、養廉銀の制度は、雍正時代における職階制的な意味を失い、固定化して単なる俸給という意味しかたとなっていた。そしてこれまでで懐仏していた官僚が次第にその本性をあらわし、養廉銀のほかに、さらに人民に対して加派を行なない陥落を要求するに至るものである。

貴州巡撫、咸寧總兵官石禮哈の上奏中に地方陥落。向因養廉不敷。藉口派取。竭民苗之脂膏以為費用。甚屬苦畨。

人とあり、貴州省では養廉が足らぬということに藉口して、民苗から陥落を徴取していた。諭旨（418）雍正三年八月初三日、署理十六日、雲貴總督高其倬の上奏中にも黔省錢糧。額數耗差無幾。或以養廉不足。加派民苗。

同様こと所述している。養廉の不足をかくか、増額を要求する傾向は乾隆時代に入ると目立って多くなる。清高宗實錄卷六九、乾隆三年五月の条に安徵巡撫今陞刑部侍郎趙國麟奏。前任撫臣程元章。因地方公事繁多。養廉不敷辦理。奏請將養湖・正陽二關。書役飯食及一切浮費裁減節存之項。解詰安慶府庫。為巡撫衙門辦公之用。
とあり、安徽巡撫程元章は地方公事が繁雑で、養廉で処理することができぬという理由で増額を上請し、と認められて
又、巡撫養廉不敷辺沿。同書卷九五。乾隆四年六月の条
行。又、巡撫養廉不敷辺沿。同書卷九五。乾隆四年六月の条
とあり、養廉不足の養廉が足らぬため、公費二千両の増加を請い許されている。養廉銀の
増額斎知、通判及州倉官養廉。
とあり、養廉の増額は普通の巡撫だけではな
かのように養廉の増額が流行すると、それにつけこんで、諸種の不正が行われる。
又、養廉銀の増額は巡撫養廉のため養廉銀を長支している。長支とは後で豫支といかえているから、将栄、支
又良卿有豫支三十五年春季養廉銀八百両。高積県布政使時。長支養廉銀七百八十餘両、庁
又良卿有豫支三十五年春季養廉銀八百兩。高積県布政使時。長支養廉銀七百八十餘両、皆
とあり、署布政使高積からも養廉銀の豫支をうけている。同書収載には、これに続いて
384
— 88 —
各省養廉。例應按季支放。今黔省已無養廉之事。恐他省似此者。亦所不免。著再申諭各省督撫暨藩司。嗣後無論大小等官

養廉。一概不准透支。其藩司自支養廉。並將支用日期。報明督撫存案。如有故違違支者。該督撫即行參究追賄。

とあり。養廉銀之支給是每年四季行納なるのが規定である。然るに貴州省で透支（養廉）をしているとすれば。各省でも行

わっているに違いない。督撫はもし豫支ある時には。考究追賄を行なえる。一切の透支を禁止せよ。藩司は支給した養廉の日を

を示せよ。と命じている。もしこういう厳謹が下されたことは。養廉銀の豫支や借支が相當広く行われていたこと

を示す証左であろうと思われる。

失行列。世勤耕作。見康熙年間。稲穀登場之時。每石不越二三錢。雍正年間。則需四五錢。無復二三錢之償。今

絹「陳明米貴之由疏」（乾隆十三年）に

臣生長鄉村。世動耕作。見康熙年間。稲穀登場之時。每石不越二三錢。雍正年間。則需四五錢。無復二三錢之償。今

には四五錢となり。乾隆十四年には五六錢にもなり。二三倍にはね上っている。乾隆十七年には糧倉の倉施闋文甲集卷一「生計篇」には次のようになっている。

大きな開きがでている。乾隆五十八年には糧倉の倉施闋文甲集卷一「生計篇」には次のようになっている。

五十年前、わが祖父や父の時には。米一束は六七文にすぎなかった。また布一文は三四十文にすぎなかったと聞い
的。今是来一升三四十文、布是一百文にも上っている。つまり、乾隆末年には、米は乾隆初期の五六倍、布は五倍にも騰貴している。田地について、前掲の楊錫絹の上疏の中に、さきごろ毎畝一、二兩のものは乾隆十三年には七、八兩になり、さきごろ七、八兩のものは、二十餘兩に至っていた。その為、価値の上昇が見えて、このように乾隆時代には、物価が相当大幅に上昇している。これは平和が継続し、人口が増加して需要が増大したためである。この物価の上昇は以後の時代も繰いてい、中国の経済の存在が急増したことが一つの大原因のようである。このように、清末も乾隆以後と、にくに物価の騰貴が甚だしく、清末期には、物価は雍正時代の数倍に上昇していた。さらに清末になると、財政の不適意から、この養廉銀さえ、支給を停止されたり、減額されるようになった。ここから養廉銀が本来の機能を果たすことができなくなってしまったのである。文職自一品至七品殊給廉銀六成。八品以下免其停給。此項銀兩。令各省藩司観明数目。提出存。由督撫專摺奏報。聴候撬用。俠軍務告竣。仍復舊額。從之。
かくして藩主を敬厳している。

政体に障害があるから行なうべきからずという懐旨を下しているから、養廉銀の停給は円滑なると、財政の緊迫、経紀の腐敗から清末に延ばす傾向を示す。

紹介

安部隆夫『清代 ROOM 研究』

史研究』所収。

岩見宏『清代 ROOM 徳の研究』所収。

武官には文官に違った養廉銀がないので武官は軍隊の定員の給料をうけながら、定員中の若干を空席のままにし、そこから浮いた費用を空糧と称し、その目用もしくは公務の用に使用した。

昭和三十六年三月、中国史

四。本稿第三章第三節C「養廉、茶規」参照。
略して名欄ともいわれた。

谷崎（28 b）河口総督白文義、雍正七年正月十四日條。

（東洋史研究一六四）

同（六）

（東洋史研究案發之三）

中 国 史 研 究

佐 伯

富 著

東洋 史 研 究 堂 発 三 之 卡

A 5 別
本文 七 五 八 頁
索引 七 五 頁
定 價 四 千 八 百 圓

本书は昭和四年昭和三年から四年まで十四年間著者が
学術雑誌などに発表した論文を三篇を輯録した論文集であ
る。本書に収めた論文において、著者は幅広く主従の立場と
その権力機構並びにその経済的基盤を追及することとともに、
裁政治が社会に及ぼした影響。とときに経済界や官僚に興えた
影響について考察を加えている。

右省御書齋の方は本舗まで御申込み下さい。

京都府在籍者に於て

東洋 史 研 究 會

東洋 史 研 究 會

京都大學 文學部內

振興 京都 三 七 二 八 番